

関市小屋名の崩止経塚について

～岐阜県博物館自然観察のこみち見晴らし台1で採集された資料～

小野木学*・長屋幸二**

“Kuzushi Kyo-zuka”, sutra mounds at Oyana in Seki City

～Collected materials at observatory-1 on the observation trail around Gifu Prefectural museum～

Manabu ONOGI, Koji NAGAYA

はじめに

この経塚は、関市小屋名小字小洞（こぼら）と小字崩止（くずし）をまたぐ山塊の小高い頂部に所在した。現在は岐阜県博物館自然観察のこみちの見晴らし台1となり遺構は残っていないが、付近で採集された資料から経塚が存在していたことが確認された。未報告のため小字名をとって崩止経塚と称し、今回報告することとする。なお、1・2・3の項は長屋が、4の項は小野木が執筆を担当した。

1. 報告までの経緯

今回紹介する資料は、岐阜県博物館の第1収蔵庫にコンテナに納められ保管されていたものである。コンテナに入れられていたメモによると、「昭和51年（1976年）8月22日、自然観察のこみち見晴らし台1付近において13点の陶器片を採集。採集者は副館長の知人で中学校の先生」とある。当館が開館したのは昭和51年5月5日であり、自然観察のこみちも同時に開放されている。採集時期は自然観察のこみちおよび見晴らし台1が造成されて間もない頃であった。当時の副館長はすでに故人であり、採集者、採集時の状況などについては明らかにすることができないが、見晴らし台1や自然観察のこみちを造成した際に遺構が破壊され資料が散布したものであると考えられる。

それから6年後の昭和57年（1982年）8月19日には、当時の考古担当学芸員によって見晴らし台1の略測図が作成されている（第2図）^{#1}。この頃にも陶器片を採集することが可能であり、プロットされている採集地点から見晴台全体に散らばっていた状況が見てとれる。この時、偶然地中に刀子があることも確認されたが、刀子は採集されなかった。

また、川原石がちらほら顔を出しているが、この山の基盤は砂岩とチャート岩の岩盤であり、川原石は人為的に持ち込まれたものである。自然観察のこみちには道筋

に岩石標本がいくらか設置されているが、これらの川原石は見晴らし台1斜面の人目に付かないところにも見られることから岩石標本とは考えられない。また、百年公園内の山の斜面や谷部には砂防、耕地化、植林などの目的で石組みが築かれている箇所がいくらかあるが、見晴らし台は山の頂部にあり、斜面に残るこれらの痕跡である可能性も低い。やはり経塚に伴うものと考えるのが妥当であろう。

他にも、数点の川原石に囲まれるようにして焼土の存在が図中に記載されているが、炭化物の有無など焼土の詳細は明らかではない。周辺の土壌は風化砂岩起源の砂質土と赤土がまだらに混じり、赤土部分は焼けて赤化した土のようにも見える。現在は焼土・炭化物とも確認できない。

その後、しばらくは当資料に対する評価がなされることはなかったが、平成15年（2003年）2月、経塚データベース作成^{#2}のための調査をしていた(財)岐阜県文化財保護センター（現(財)岐阜県教育文化財団文化財保護センター）小野木学により当資料が図化された。

2. 遺跡の現状

崩止経塚は北緯35° 28' 32"、東経136° 52' 15"、標高97mの崩止山頂部に位置する。現在は見晴らし台1として削平され、11m×7mほどの平坦地となっている。見晴らし台の中央にコンクリート製のテーブルと4基のストール、西側に2基のコンクリート製背なしベンチが置かれている。所々に川原石が散見されるが、位置は昭和57年の略測図とは異なっている。陶器片もわずかに採集される。筆者も中央テーブルの北50～80cmの地点で数点の陶器片を採集した。遺物の散布が確認されているのみであり、遺構の構造などは不明である。

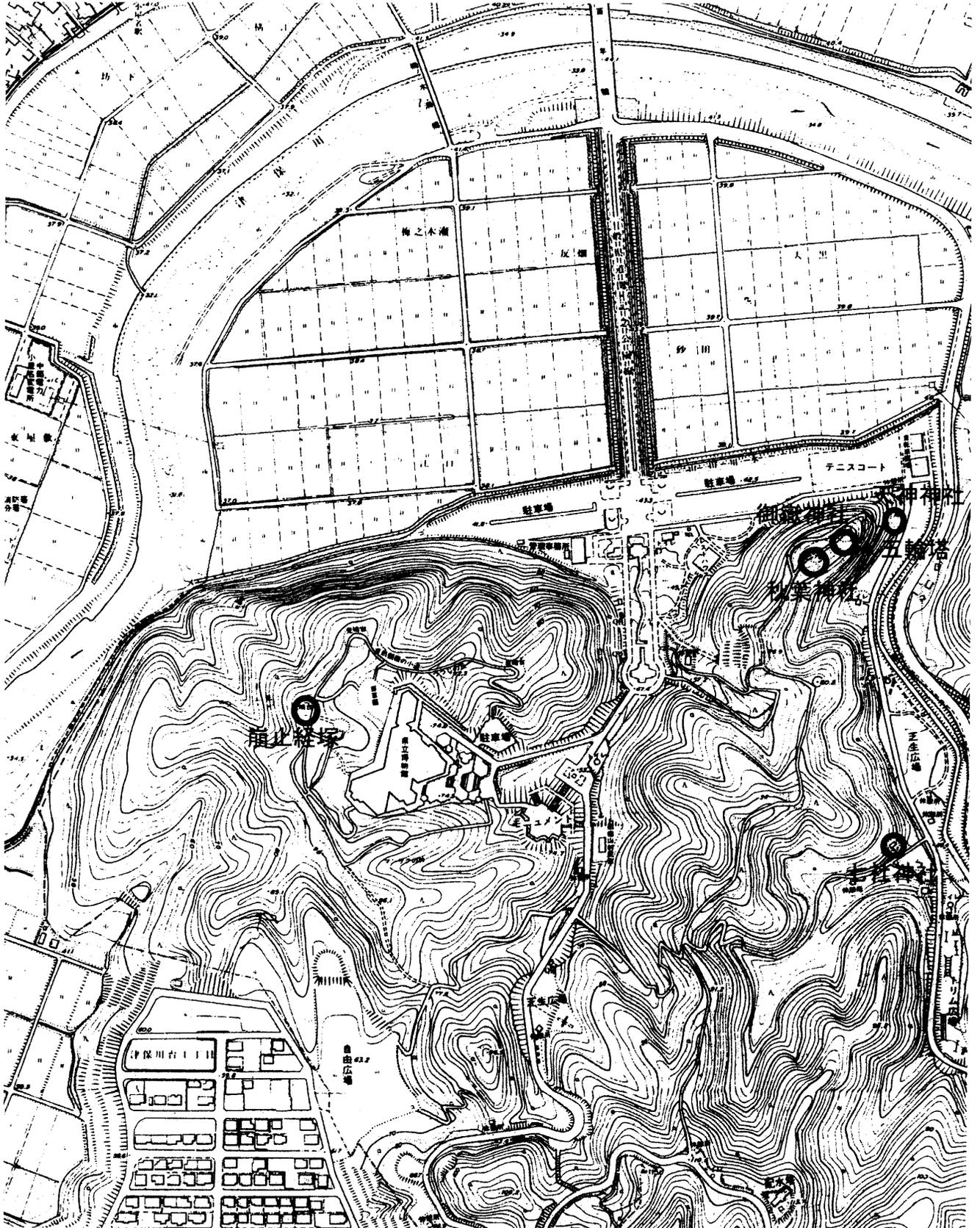
経塚のあった見晴らし台1は、北・西方の眺望に優れている。近くは関市小屋名・上白金・岐阜市三輪の集落を水田地帯の中に見下ろし、彼方にはほぼ西に伊吹山、

* (財)岐阜県教育文化財団文化財保護センター ** 岐阜県博物館

北西に冠山・能郷白山、ほぼ北に高賀山などを望むことができる。現在は雑木に遮られているが、これがなければ北東に御嶽山なども望むことができる（第5図）。

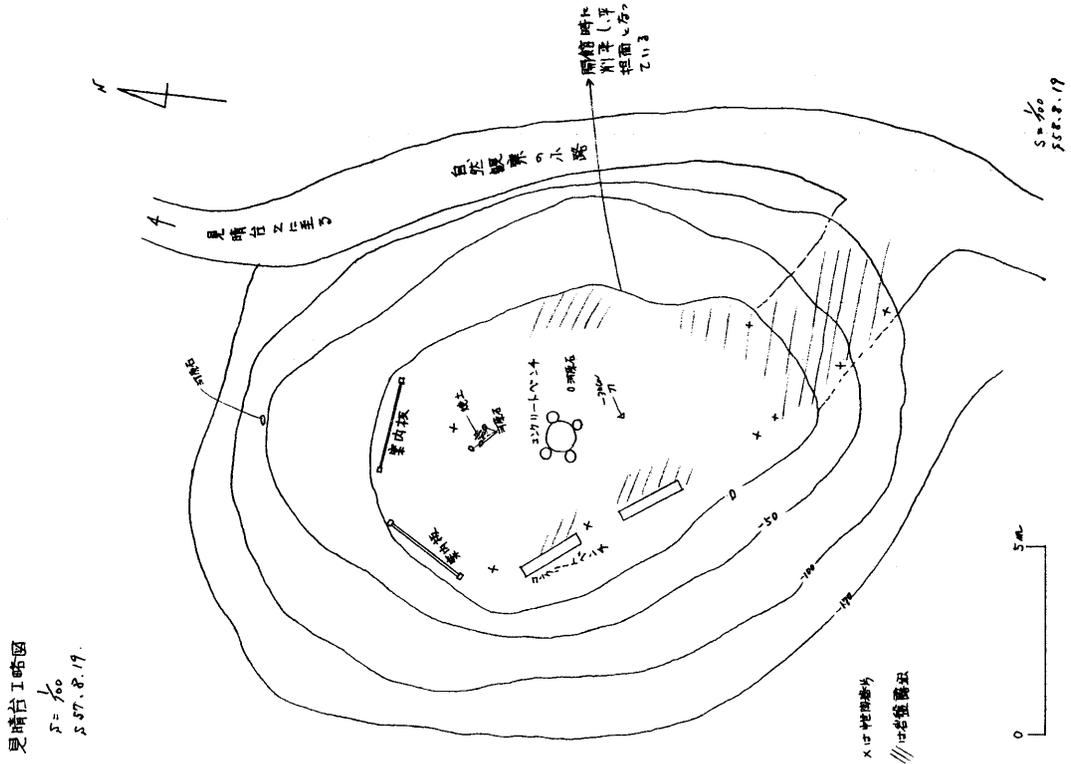
3. 遺跡の環境

弧を描くように曲流する津保川が山塊にあたっているところが崩止である。このすぐ下流の左岸にも、漢字を変えて「関市山田久寿志」の地名が見える。この山塊の北・西側は急斜面であるが、東側は緩やかで広い谷によつ

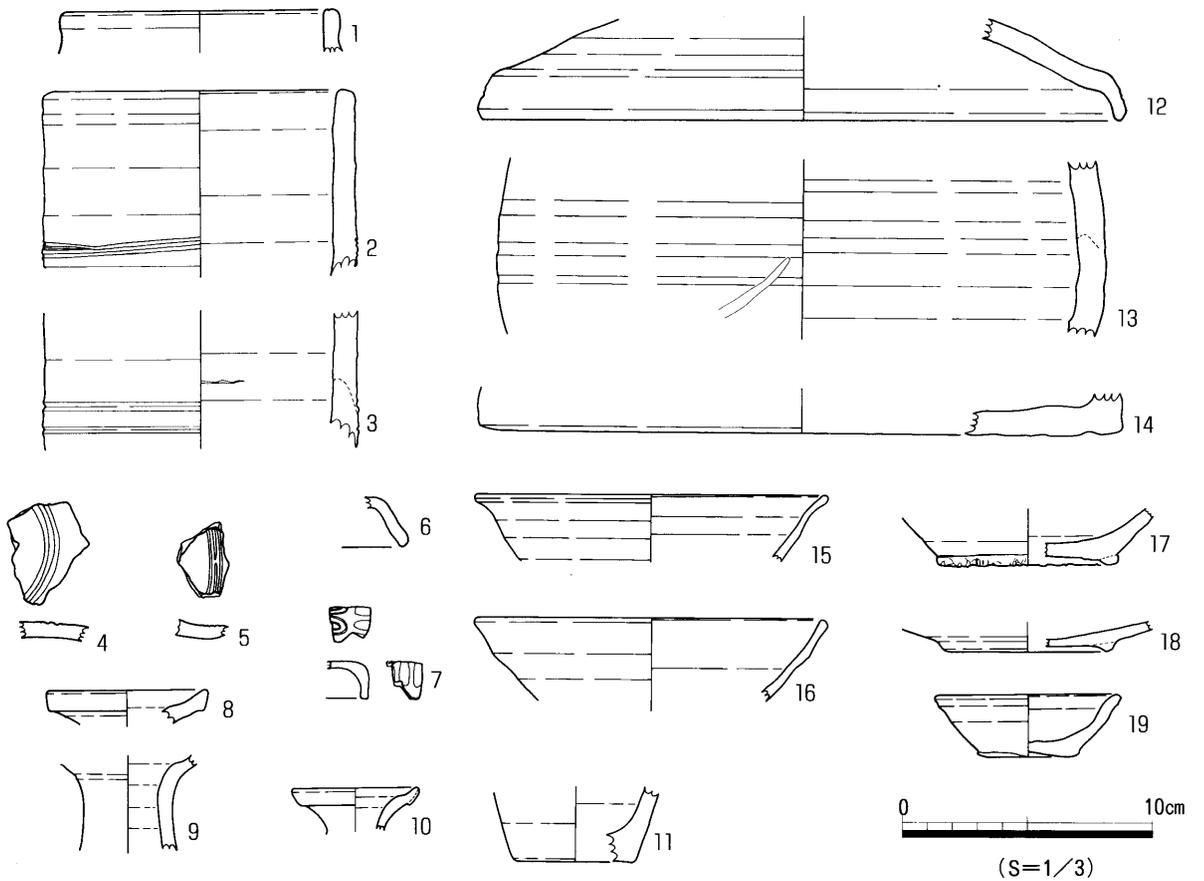


第1図 崩止経塚とその周辺

scale 1:2,500



第2図 見晴台I略図 (原図を50%縮小)



第3図 採集遺物実測図

て枝状に刻まれる。谷部の小字は小洞といい、岐阜県博物館・百寿の塔・噴水ひろばなどになっている。谷筋には、かつて水田とした狭小な平坦地が散在している。小洞の東の山が小字花ノ木、花ノ木の北側に広がる水田地帯が小字砂田である。

17世紀頃までは、砂田や津保川対岸の東屋敷・西屋敷に集落が営まれていた。崩止山から北西に400mほど離れた津保川対岸の西屋敷には白山神社があったが、宝永2年(1705年)、もしくは寛永2年(1625年)に小屋名新屋敷の春日神社に移転・合祀されている。砂田にも寺社が置かれていたと伝えられる(亀山 1988)。

現在、花ノ木山の尾根北側先端に秋葉神社、御嶽神社、東麓に天神神社、七社神社(小屋名では向山の権現様とも呼んでいる)などが見え、正月には小屋名集落の人々が初詣に訪れる。また、天神神社脇には2基の五輪塔が並んでいる(第1図)。

一方、崩止山には神社などは見られない。寺社にかかわる伝承も見あたらない。ただ、尾根東端でお盆の精霊送りの松明が焚かれていた(チンチンカカと呼ばれる。現在は行われず、代わりに津保川の川原で花火を打ち上げている)が、これも崩止山が集落に面していた山であった以上の理由はないようである。送り火のため山を登る際には、道の緩やかな小洞を経由するのではなく、北側の急斜面を苦労して登ったということである。

4. 遺物

採集された遺物は合計63点である(点数は接合後の破片数を示す。以下同様)。その内訳は美濃須衛型白瓷系陶器36点、東濃型白瓷系陶器14点、白瓷(産地不明)6点、中国磁器(青白磁1点、青磁1点)2点、瀬戸美濃(連房)1点、縄文土器3点、不明1点である^{註3}。美濃須衛型白瓷系陶器は碗、皿、小杯、経筒、経筒蓋、経筒外容器、経筒外容器蓋などの器種があり、東濃型白瓷系陶器は碗、皿のみである。白瓷は碗と小壺、瓶類の破片である。

以下、図化した遺物の説明をする。7は中国産の青白磁、8～11・18は白瓷、15～17は東濃型白瓷系陶器、それ以外は美濃須衛型白瓷系陶器である。1～3は経筒である。体部外面に2条一組の沈線が2段以上に施され、口縁部はわずかに外傾して面取りされる。4～6は経筒蓋である。4は鈕部に近い破片で、5は口縁部に近い破片であるため、天井部外面には2～3条一組の沈線が2段以上に施されていたといえる。6の口縁端部は丸く仕上げられている。7は平形合子蓋である。口頸部外面に縦方向の沈線、天井部外面に一花を配した菊花文が施されている。8・9は小瓶である。8は口縁端部にわずかに

に外傾する縁帯をもつ。10・11は小壺である。10は口縁端部が外側に折り返されており、11は底部が厚い。12は経筒外容器蓋である。口縁部内面は回転ナデにより大きく窪み、胎土は須恵質である。13・14は経筒外容器である。13は須恵質であり、14は平底でやや焼成不良である。15～17は碗で、15・16は口径から判断して大畑大洞4号窯式、17は底部形態から白土原1号窯式に属する。18は皿であり、高台は断面三角形を呈する。19は小杯である。底部はわずかに突出し、口縁部は外反気味である。

経筒や経筒外容器、青白磁合子蓋は明らかに経塚に伴う遺物であり、経筒片が最低でも2個体認められることから、経塚は2基以上存在していたと思われる。経塚の年代は、青白磁合子蓋(7)や美濃須衛型白瓷系陶器の小杯(19)から判断して、12世紀～13世紀前半に属するといえる。しかし、白瓷が幾つか採集されていることから、やや時期が遡る可能性もある。東濃型白瓷系陶器はいずれも13世紀後半以降に属し、青磁碗は外面に鎬連弁文を有する破片であることから、同様に13世紀後半以降の年代観が与えられる。そのため、経塚造営以後も、この地に人々の往来があったことは間違いない。

出土遺物のうち、美濃須衛型白瓷系陶器が最も多いことは関市洞雲戸遺跡の経塚群と類似する^{註4}。それ以外でも、美濃加茂市十二社神社経塚、垂井町伊富岐神社経塚、久瀬村大河原経塚などの経塚で美濃須衛型白瓷系陶器が確認されている^{註5}ことから、美濃地方の経塚には美濃須衛窯で焼成された器種が一定量供給されていた可能性が指摘できる。

注1 図の左上にS57.8.19、右下にS58.8.19の日付があるが、資料が納められているコンテナには昭和57年8月19日付けのメモがある。

注2 国立歴史民俗博物館「考古学資料の情報集成的研究」事業

注3 採集遺物のうち、いわゆる「山茶碗」の産地がすべて識別できたので、遺物の名称を「美濃須衛型白瓷系陶器」・「東濃型白瓷系陶器」とした。そのため、いわゆる「灰釉陶器」を「白瓷」と表現した。

注4 (財)岐阜県教育文化財団文化財保護センター2003『平成14年度年報』

注5 これらの経塚の遺物はすべて実見し、美濃須衛型白瓷系陶器が使用されていることを確認した。

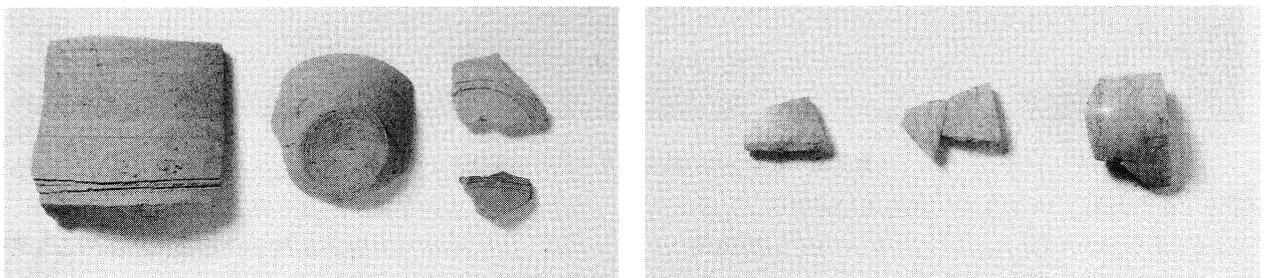
参考文献

亀山喜三 1988「小屋名集落の形成」『ふるさと小屋名』
小屋名郷土史編纂委員会

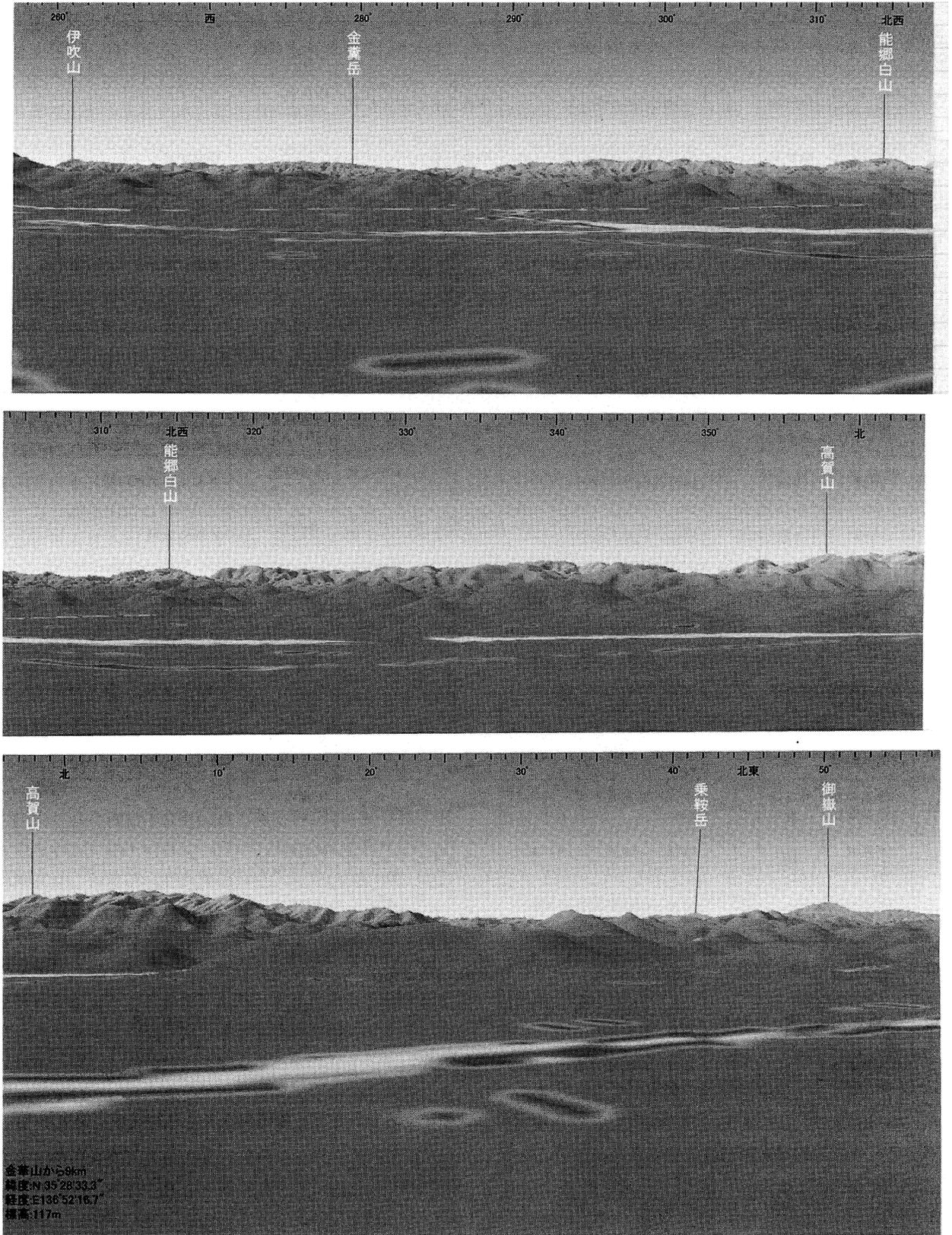
表1 遺物観察表

掲載番号	器種	口径 低径器高	整形・調整	胎土	色調断面	その他
1	美濃須衛型 白瓷系陶器	経筒身 (11.0) — —	口縁部内外面横ナデ	やや粗、径1mm以下の長石をわずかに含む	灰白色 (10Y8/1)	
2	美濃須衛型 白瓷系陶器	経筒身 (12.4) — —	体部外面横方向の板ナデ、 体部内面横ナデ	やや粗、径2mm以下の長石をわずかに含む	灰白色 (7.5Y7/1)	器面がざらつく
3	美濃須衛型 白瓷系陶器	経筒身 — — —	体部外面砂粒が動く 横方向の板ナデ、内面横ナ デ	やや粗、径3mm以下の長石を幾つか含む	灰白色 (2.5Y8/1)	2と同一固体の可能性はある
4	美濃須衛型 白瓷系陶器	経筒蓋 — —	天上部内外面回転ナデ	やや粗、径5mm以下の長石を幾つか含む	灰白色 (2.5Y7/1)	沈線は断面V字形を呈する
5	美濃須衛型 白瓷系陶器	経筒蓋 — —	天上部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石、石英を幾つか含む	灰白色 (5Y7/1)	内面下端部がわずかに凹むため口縁部の近い位置にある
6	美濃須衛型 白瓷系陶器	経筒蓋 — — —	口縁部内外面横ナデ、天井部外面砂粒が動く程度の横方向の板ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	灰白色 (Y8/1)	やや須恵質
7	青白磁	平形 合子蓋 — —	天井部～口縁部内外面回転ナデ	密	浅黄橙色 (10YR8/4)	口頸部外面に縦方向の沈線、天井部外面に一花を配した菊花文、口縁部から内面露胎
8	白瓷	小瓶 (6.4) — —	口縁部内外面回転ナデ	密、径1mm以下の長石を幾つか含む	浅黄橙色 (10YR8/3)	外面に自然釉降灰
9	白瓷	小瓶 — — —	頸部内外面回転ナデ	やや粗、径1mm以下の雲母をわずかに含む	黄橙色 (10YR8/6)	外面に灰釉
10	白瓷	小壺 (5.1) — —	口縁端部内外面回転ナデ、口縁端部外面折り返し	やや粗、径1mm以下の長石をわずかに含む	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	頸部内面に窯糞付着、内外面に灰釉
11	白瓷	小壺 (4.6) — —	体部外面板状工具による板ナデ後、回転ナデ、他は回転ナデ	やや粗、径1mm以下の長石をわずかに含む	灰黄色 (2.5Y7/2)	外面に灰釉
12	美濃須衛型 白瓷系陶器	外容器 蓋 (25.8) — —	天井部外面上方回転ヘラ削り、他は回転ナデ	粗、径5mm以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	灰白色 (10YR7/1)	やや須恵質、口縁部内面は大きく凹む
13	美濃須衛型 白瓷系陶器	外容器 身 — — —	体部外面板状工具による横ナデ後、回転ナデ、内面回転ナデ	やや粗、径4mm以下長石、石英をわずかに含む	淡黄色 (2.5Y8/4)	体部外面に浅い溝あり、偶発的なものの可能性が高い
14	美濃須衛型 白瓷系陶器	外容器 身 (25.4) — —	底部外面調整不明、内面回転ナデ	やや粗、径2mm以下	灰黄色 (2.5Y7/2)	
15	東濃型 白瓷系陶器	碗 (14.0) — —	体部～口縁部内外面回転ナデ	やや粗、径1mm以下の長石をわずかに含む	灰白色 (2.5Y8/2)	
16	東濃型 白瓷系陶器	碗 (14.0) — —	体部～口縁部内外面回転ナデ	やや粗、径1mm以下の長石をわずかに含む	淡黄色 (2.5Y8/4)	外面に窯糞付着
17	東濃型 白瓷系陶器	碗 (7.2) — —	底部外面回転糸切り、高台端部初殻痕付着	密、径1mm以下の長石をわずかに含む	灰白色 (5Y7/1)	
18	白瓷	皿 (6.6) — —	底部外面回転糸切り後ナデ調整、他は回転ナデ	密	灰黄色 (2.5Y7/2)	低部内面平滑
19	美濃須衛型 白瓷系陶器	小杯 (7.4) (4.0) 3.3	底部外面回転糸切り、体部内外面回転ナデ	やや粗、径1mm以下の長石をわずかに含む	灰白色 (2.5Y7/1)	須恵質で、器面がざらつく

※法量単位はセンチメートルで、数値の(カッコ)は推定値を示す。



第4図 採集遺物写真



第5図 経塚からの眺望 (カンミール3Dにより作成)